

(1) 築地本願寺本堂透視圖。

築地本願寺本堂復興工事の大要

徳田鼎

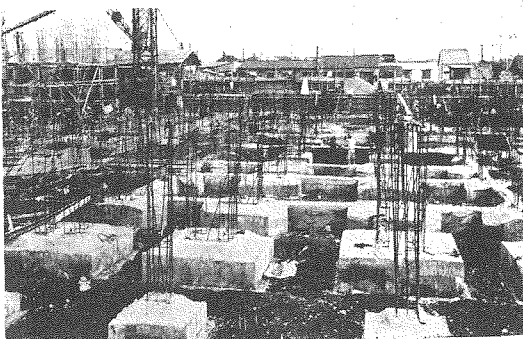
はしがき

築地本願寺は、京都本願寺の別院で、元和七年に准如上人が、時の中央政府たる幕府の所在地江戸に別院を建て、教團本部から全国の教線に號令しようと云ふ計畫のもとに、濱町御防と稱して創建したものである。

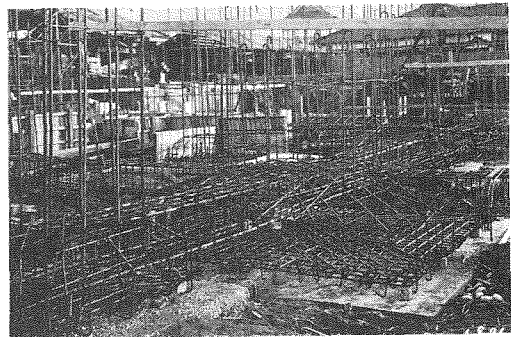
爾來三百年、その間にあの有名な振袖火事

に遭つて現在の築地に移轉したが、更に所謂天災地變によつて堂を倒すこと、前後を通じて實に八回の多きに達してゐる。その最後の災厄は、今尙世人の心膽を寒からしめてゐる大正十二年九月一日の大震災であつた。而して今度の復興工事となつたのである。

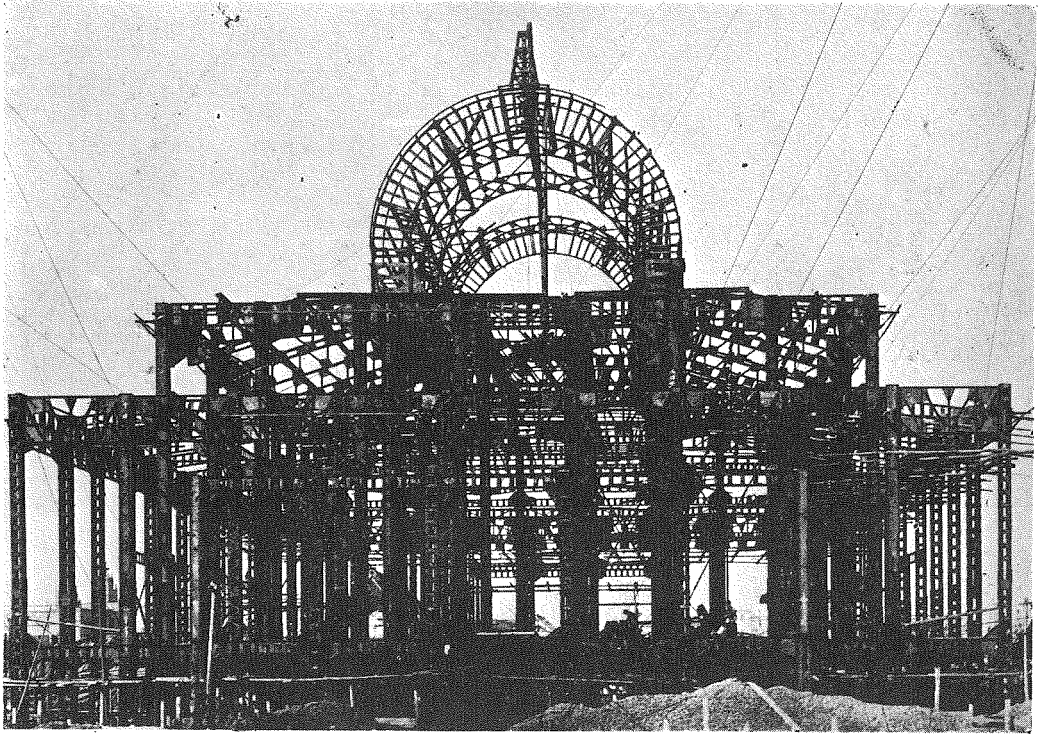
設 計



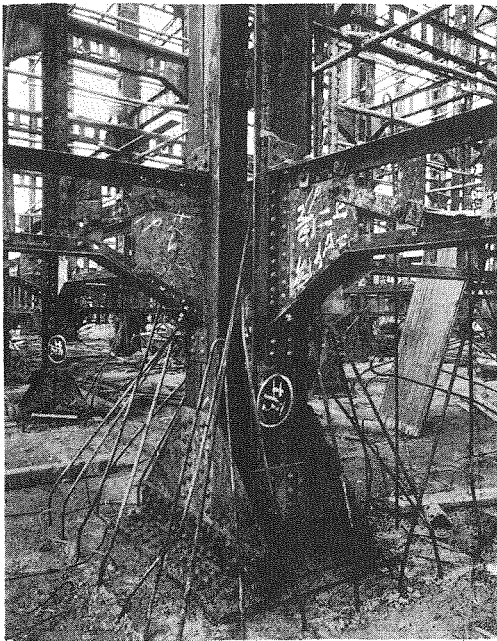
(2) 本堂基礎配筋。



(3) 基礎理戻埋戻し。



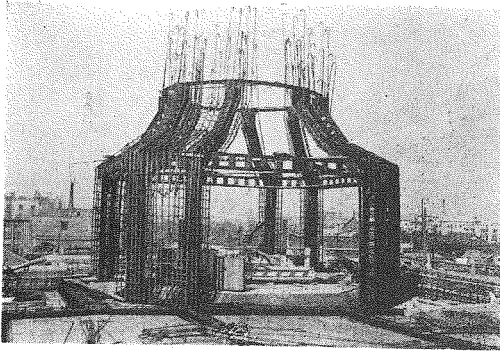
(4) 本 堂 鐵 骨 全 景



(5) 鐵 骨 詳 細

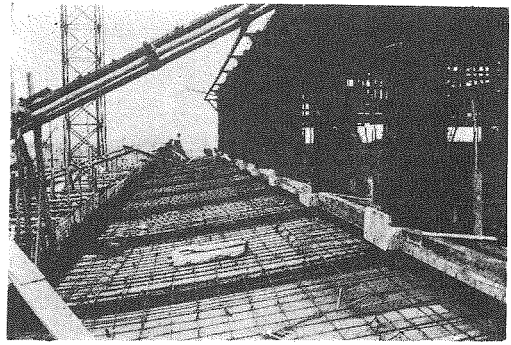


(6) フ - ム 假 柱 据 付。



(7) 鐘 樓 鐵 骨。

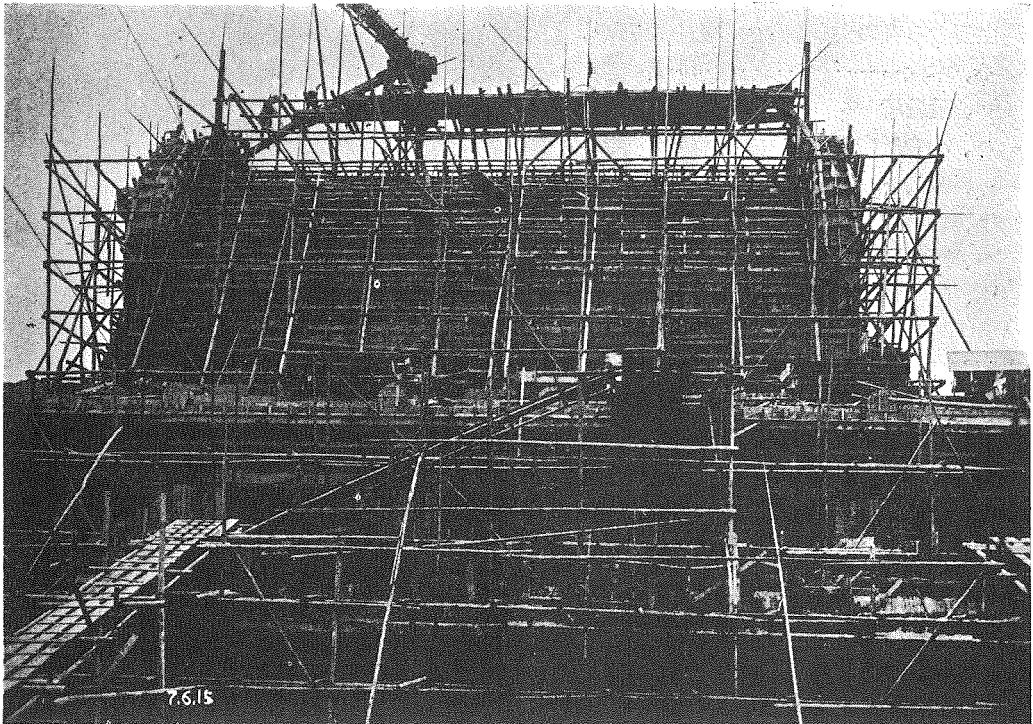
設計は東京帝大名譽教授伊東忠太博士外十二名の人人によつてなされたもので、様式は印度佛教式、古代中天竺に行はれた様式を基礎として、適宜に換骨奪胎し、且つ後期印度式の手法を加味されてゐる。細部には爪哇のブロン、ブドルその他印度系の地方の手法が適用された。本堂の内部は純日本式であるが、外陣は椅子式となる、その他は適宜に他の様式を攝取する。



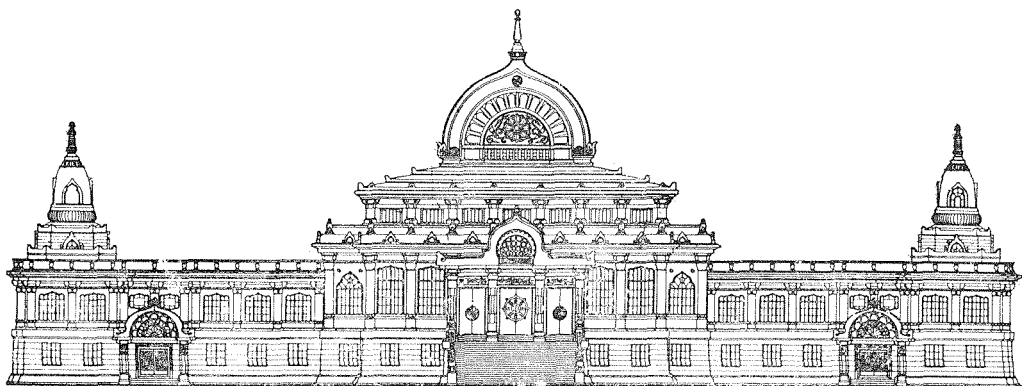
(8) 本 堂 屋 根 混 凝 土 打。

【備考】 この様式を健陀羅(ガンダラ)式と稱するは當らず。大體に於て、古代中印度佛教式と云ふを妥當とす。純正印度式は建築物の目的、彼我風土の相異等の關係上實施し難きものあり、適當に改竄變形を要する所以なり——工學博士伊東忠太。

工 事 の 大 要



(9) 本 堂 混 凝 土 工 を 終 る。



(10) 築地本願寺本堂正面姿圖。

工事は我國社寺建築界に古き歴史を有する松井組の一式請負で、昭和六年四月假本堂の移轉に始まり、續いて五月から基礎工事に着手した。建物の概要は次の通りである。

正面總間口……………48間
 奥行……………31間
 高さ(本堂棟最高)……………110尺
 建坪……………930坪
 延坪……………1961坪

主要なる室の大きさは次の通りである。

イ、本堂……………435坪
 ロ、説教所……………70坪
 ハ、小會議室及控室……………50坪
 ニ、議場……………70坪
 ホ、各事務所……………430坪
 ヘ、讀書室及日曜學校 ……51坪
 ト、地方僧侶及青年宿泊所…51坪

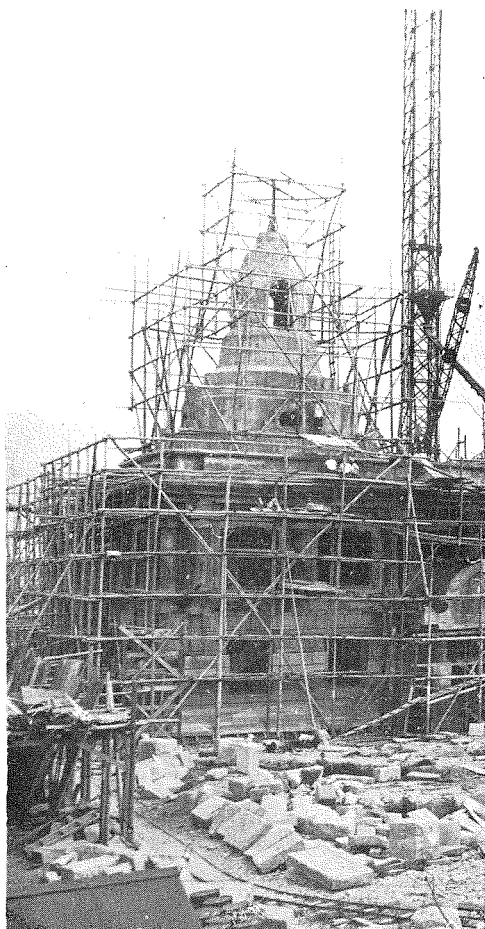
(平面圖參照)

而して、構造は、基礎を混凝土杭打とし本堂が鐵骨鐵筋混凝土造で兩翼は鐵筋混凝土造である。

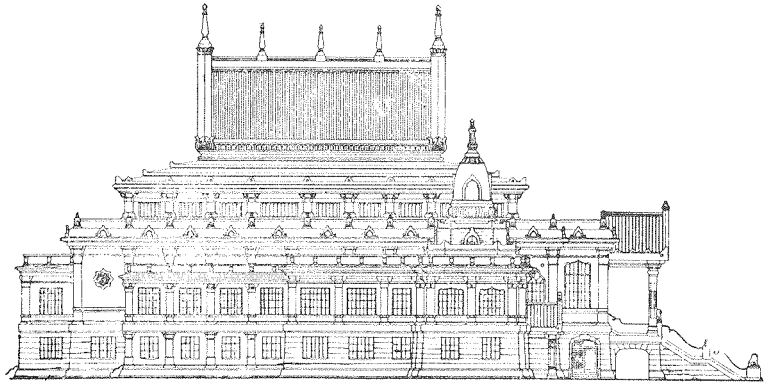
外部は一階通り鬼花崗石張、二階は人造石小呷仕上で、蛇腹上は全部人造石洗出仕上けとなる。内部は本堂を純日本式で行く外は前述の通り適當の様式が取り入れられる。

工事は現在混凝土工事の全部を終り、外部石張其他内部工事中で、明年10月には完成する豫定であるが、竣功の上はその莊嚴な古典的様姿が東京新風景の一つとなるばかりでな

く、昭和時代に於ける寺院建築の一新機軸として久遠に傳へられることにならう。

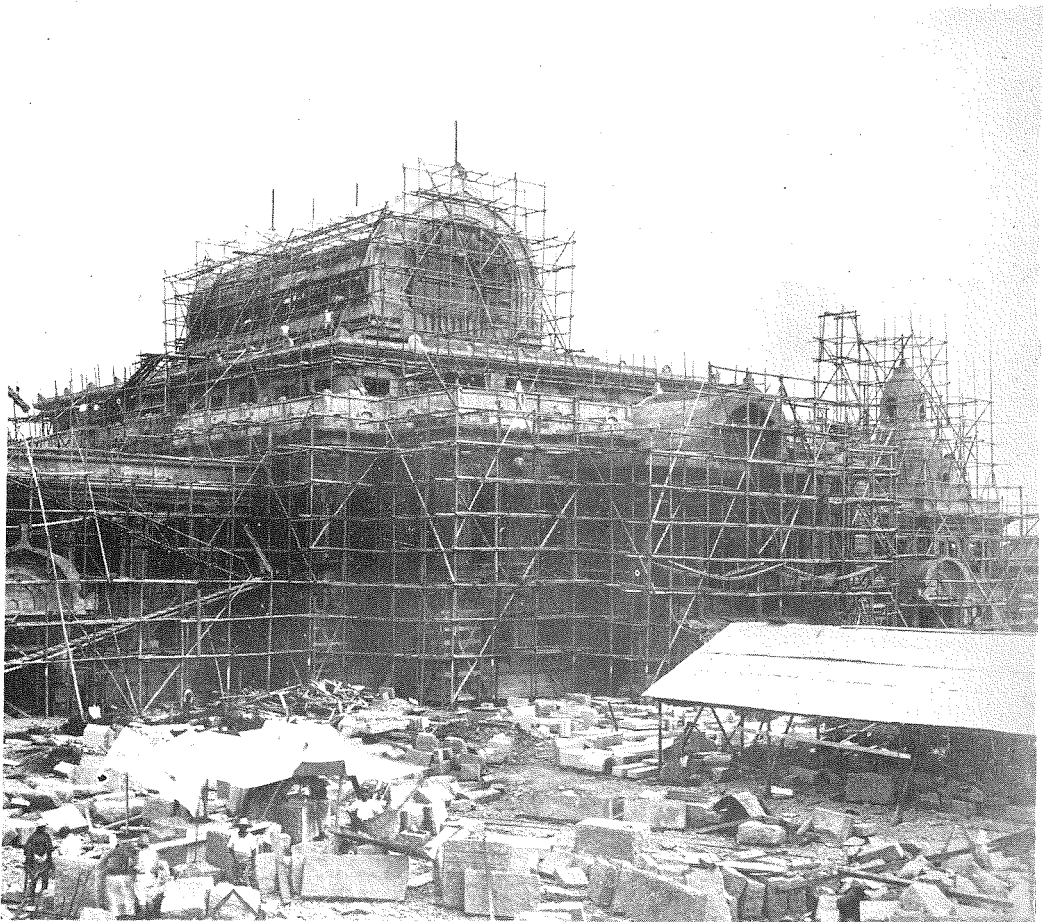


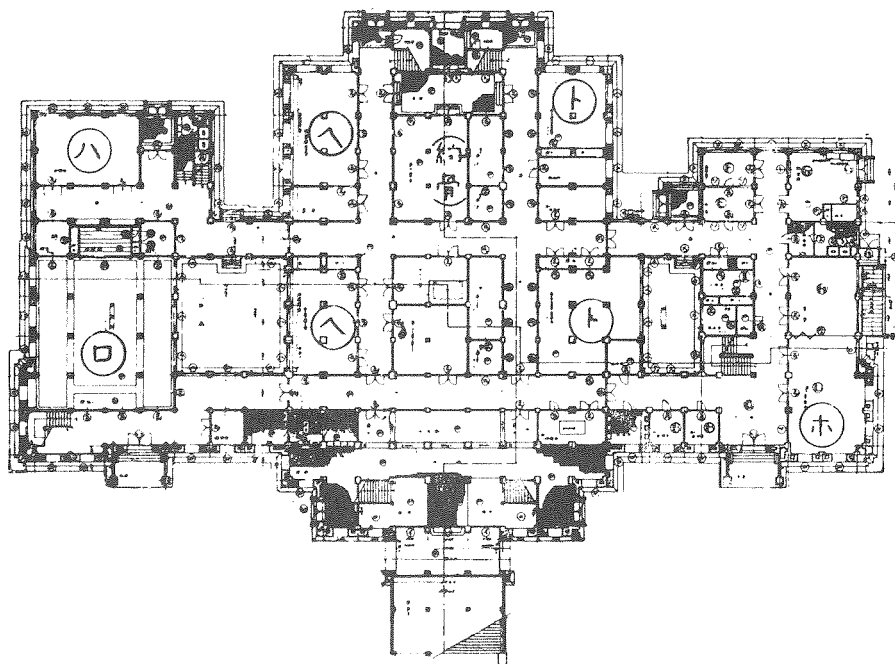
以上の工事に要する費用は總額111萬圓で、内建築費99萬圓、電氣、暖房、衛生、家具裝飾等の附帶設備費として12萬圓充てられてゐる



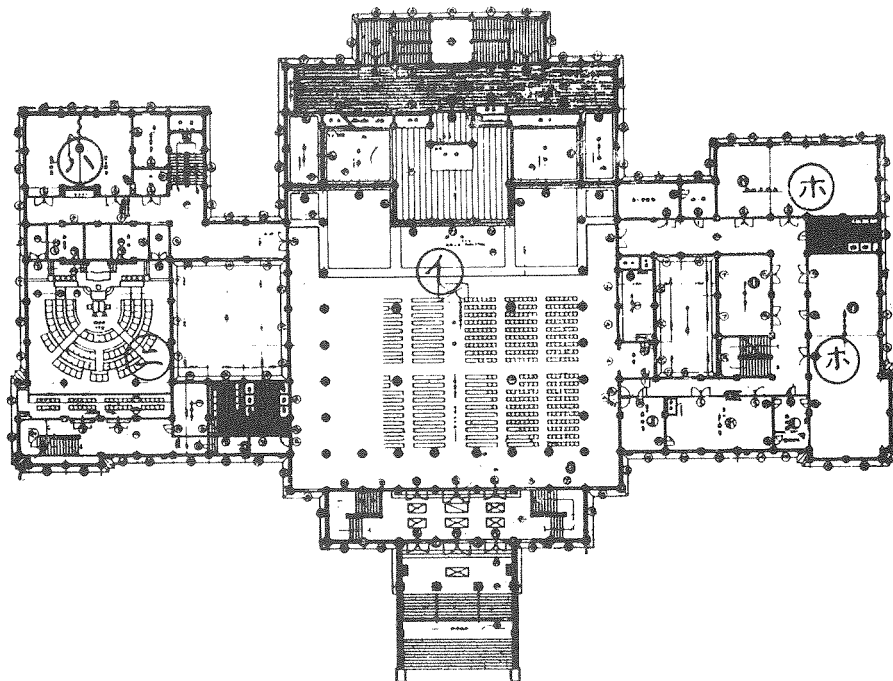
(11) 築地本願寺本堂側面姿圖°

(12) 混泥土工を終り外装工事中の本願寺。(向つて右の塔屋は鼓樓左は鐘樓である°)





(13) 築地本願寺本堂一階平面圖。



(14) 築地本願寺本堂二階平面圖。